

## 4388 地球のかおり：「北極圏の海峡」(産経新聞) 心模様

この先、何があるのだろうか。雪解けの季節。

あの船影は、どこを目指しているのだろうか。まさに、絶景。

ノルウェー、北極圏の海峡は、まさに、夢とロマン。

ひとり旅は、さみしいどころか、想像の世界に、招待してくれる。

好きなことが、やれる。ワクワクする。これは、自己責任だが、元気の源泉。

生き生きしてくるのがわかる。ひとり旅の醍醐味。

観光案内には、眼前にせまる、フィヨルドの美しさ。

切り立った、険しい氷河。豪快な滝。

大自然の中を、果てしなく、つづく、フィヨルド。

確かに、スカンジナビア半島のハイライト。

人間には、想像する特権と世界がある。

北極圏に行くほど、山は、なだらかになっていく。

雪解けの季節、6月。

スカンジナビア半島の、最北端のノールカップをめざし、

**悪戦苦闘の末に到達。** トップ オブ ヨーロッパ。

北緯 66・33 度から、北極圏が始まる。

このシーンは、その帰路に遭遇した、ワンシーン。

自然の驚異を体験してきた私には、なんとも穏やかな光景に映った。

輝く水面<sup>みずも</sup>の、なんと美しきことか。

豆粒のように、小さな船影。

大自然の前では、人間は、なんと小さい存在なのか、と

痛感してきた後<sup>あと</sup>だけに、言葉なく、この光景に見入っていた。

いろいろあった。充実感もある。

誰にも邪魔されない。静かな時を、瞑想で楽しむ。  
哲学の時間とは、大げさな表現だが、静寂の素晴らしさ。  
心まで清められるのが、わかる。

**情報洪水や喧騒**に、疲れている私には、至福の時間。

お腹いっぱい、実に美味しい空気をいただいた。  
その美味しさは、現場に立たないと、わからない、最高のご馳走。  
都会の喧騒が、嘘みたい。脱日常も、ここまでやれば最高。なんという贅沢。  
**これまでの厳しさや、苦勞を忘れる。**  
こんな瞬間があるから、止められない。  
実に無駄なことをやっている。それが、私には貴重。

航跡と、照りつける光のショー。スピードは、速いのだろう。  
しかし、そうは見えない。しばらく、目を奪われて、凝視していた。  
北極探検の寄港地として、トロムソ。  
船着場には、ローマル・アムンゼンの像がある。  
多分、その港からの、船なのか、それにしても、船影が小さい。  
どこを、目指しているのだろう。想像が広がる。  
いつまでも、とどまりたいような誘惑にかられるから不思議。  
次に、訪ねる可能性は、少ない。  
また、このシーンに出会える保証はない。この光景も、一期一会。

自然は、同じ表情を、見せてくれない。  
目にしっかりと焼き付けた。目だけではない、五感と心に・・・  
私と船とは、逆方向を目指す。あなたは、左に、私は右に。  
豆粒になるまで、船影が消えるまで・・・

後日、このシーンは、和紙夢絵作品になった。  
純<sup>こうぞ</sup>楮<sup>す</sup>寒漉き和紙は、耐久性一千年、使用した顔料は、百年持つ。  
夢絵作品の中へ、心まで、染め込んだ。